

教育実践報告

富士市立原田幼稚園における「全体的な計画」編成の過程

市川里恵子*・真田登紀子*・森山知絵*・遠藤由佳*・大橋和子*・白男川久美子*
・勝亦律子*・田宮 縁**

The Process of Curriculum Organization at the meeting in the Kindergarten

Rieko Ichikawa Tokiko Sanada Chie Moriyama Yuka Endo Kazuko Ohashi
Kumiko Shiraogawa Ritsuko Katsumata Yukari Tamiya

要旨

本論は、2021・2022 年度富士市教育研究発表会で発表された 2 年間の研究成果をもとに、富士市立原田幼稚園園内研修で行われた「全体的な計画」編成過程の内実を明らかにしている。

キーワード： 園内研修 全体的な計画 グランドデザイン 指導計画 エピソード記述

はじめに

本論は、2023 年 3 月に閉園する富士市立原田幼稚園で行われた 2021・2022 年度富士市教育研究発表会に向けての 2 年間の研究成果である。この 2 年間は、富士市から静岡大学への研究委託事業「富士市教育・保育訪問支援事業」の一環として、第 8 筆者が発表会前に、3 回、公開保育と事後の園内研修に参加、事前の相談に 1 度訪問し、研究発表会（2022 年 11 月 8 日）を迎えた。職員は、園長、副園務主任、教諭 4 名（5 歳児 1 クラス、4 歳児 1 クラス、ことばの教室 2 クラス）、教育サポート員 1 名の計 7 名である。

本園は富士市の中央部に位置し、南には東海道の古道である根方街道を有し、街道沿いには富士山や愛鷹山にしみこんだ地下水が湧き水として現れているポイントが数多くある。街道の南には岳南鉄道岳南線が通り、その南部には複数の製紙工場が有数する地域に位置する。

少子化等の影響により、園児数が減少する中、あえて「少人数の良さ」に注目し、研修テーマ「主体的な子どもを育む環境構成～少人数の良さを活かした保育～」を進めてきた。教育目標等詳細は、最終ページのグランドデザインを参照いただきたい。

本園の研究の大まかな流れと園児数減少の状況について、第一筆者は、研究発表要項の冒頭で「富士市公立教育・保育施設再配置計画に基づいて 2023 年度末をもって閉園が決まっていた本園にとって、園児数の減少が喫緊の課題であり、職員皆が焦燥感にかられている中での研究のスタートでした。（中略）2021 年 3 月当初に打ち立てたグランドデザインも今一度吟味し、精選することを皆で考えるところから始め、取り組むべきことの方向性を整理した 1 年目でした。研究 2 年

目の 2022 年に入り、いよいよ 3 歳児は入園なし、4 歳児は 3 名へと減り、5 歳児だけは 15 名と、正真正銘の年長的にアンバランスな少人数保育になりました。年中児の転園が重なったことで、閉園も一年前倒しになり、2022 年度中に閉園することが決まりました」と述べ、「数年前から少人数保育になるであろうことを覚悟していても、いざ、目の前の子どもと対峙すると、今まで当たり前のようにやっていたことが、当たり前のようにできないことに困惑してしまい、日々、悩みはつきません」と本音を記している。

1 年目の 2021 年度は、「目の前にいる子どもたちにとっての園内環境を丁寧に見直すことで見えてくることを探すこと、自然と教師自身も楽しめるような環境を作っていくことが子どもの主体性にもつながる環境になる」という共通理解のもと、子どもたちが好んで遊んでいる園庭の植え込み「せせらぎ」の活用の方法の検討から園内研修を開始した。

それと並行し、一体的に教育活動が展開されることを企図した「全体的な計画」の核となるグランドデザイン、指導計画のスタイルの検討も重ねた。また、指



* 富士市立原田幼稚園

** 静岡大学

導計画の出発点となる「子ども理解」、実践のリフレクションも研修の重点とした。なぜなら、教育は、置かれている環境により、似ているケースはあったにしても、同じことは起こらない。したがって、実践者が何を考え、どのような実践を行い、子どもも実践者もどのように変容したのかを扱うことが研究となる。本論では、本園の子ども理解から出発する計画、そして実践、評価のありのままの研究の過程を明らかにすることを目的としている。

1 研究テーマ設定について

変化が急速で先の見えない社会の中、次世代を担う子どもたちには、積極的に様々な変化に向き合いながら、他者と協働して問題を解決していく力が求められている。

本園の園児の実態は、「やりたい」という意欲はあるものの、何事も慎重で遊び出すまでに時間がかかる子が多かった。また、人や物に関わる体験の少なさも見受けられた。そのため、子どもたち1人1人が伸び伸びと園生活を過ごしながらか、対話的で深い学びを重ねていけるような環境構成の工夫を考えていきたいと思ったため、研究テーマを「主体的な子どもを育む環境構成」とした。

しかし、この研究テーマ設定に至るまでもに紆余曲折があり、研究始めには、園児数の減少が見込まれることから「少人数の良さや課題を生かした質の高い保育の保証」をしていこうとしてこれを大テーマに掲げていた。多方面からの具体策をあげて、実際に行ったことに対する子どもの姿を検証することで保育の質を高めようと思って動き出したが、うまく軌道に乗せることができずにいた。

2 研究経過

(1) 1年目の取り組み(2021年度)

① グランドデザインの見直し

研究始めは、「質の高い保育の具体策(柱)」として、教師がやるべきことを項目ごとにあげた。しかし、たくさん羅列しすぎて、検証する際に、実際にやったことと子どもの姿をただ記すのに時間がかかり、深い話し合いがしにくいことを感じ始めていた。

【図1】検証をし始めた当初の記録

環境構成	子どもの姿	反省・考察
○異年齢の交流 ●年長児が年少児に教える場作り ・朝の支度 ・身体測定	・最初は緊張している様子の年長児も、回数を重ねる中で慣れてきた。	・回数を重ねる度に、異年齢の関わりが深まっている。異年齢の友達と接することを楽しくなっている。 ・年長児がいることで、より遊びが盛り上がっていたのではないかと。年少、年中児も刺激を受ける場になっていた。
●関わって遊ぶ場作り ・ブラフォーミング ・体操 ・蛇じゃけん ・鬼ごっこ(おおかみさん)	・年長児が率先して遊びを進めていた。 ・年長児がいることで、より言動が活発にな	・担任自身が育てたいものを明確にし、意図があるからこそ、子どもたちも交流を意識していたのではないかと。それぞれの

第7筆者のご助言のもと、職員間で議論を重ね、特に力を入れて取り組むべき内容を精選していくことにした。

この話し合いが、もう一度、自分たちがやりたいこと、やれることを真剣に考える場になった。

【図2】最初に掲げたグランドデザイン



このグランドデザインについて、園内研修(2021年7月では、以下のような対話)がなされた。

・つなげる(異年齢交流、地域の人材活用等)、高める(職員の資質向上)、体験する(SDGsの推進、食育飼育・栽培等)の3つの柱をたてて、やることを網羅。

・月1回、柱をもとに環境構成や子どもの姿について意見を出し合っていたが、取り組み内容を数出すだけで、時間が過ぎてしまう…。

・もっと一つの事例に対して、掘り下げて話し合いができないだろうか？

・今いる子どもの実態を考えながら、もう一度、具体策を精選していこう。

【図3】話し合い経過途中のグランドデザイン



このグランドデザインについて、園内研修では、以下のような対話がなされた。

- ・当初は、サブテーマにしていた内容を研究テーマとし、より子どもに向き合うことができるような内容に変更。
- ・見た目はスッキリしたが、以前のグランドデザインの良さが消えた。3つの具体策にもう一度絞って、取り組み内容を考えるべき。(食育・飼育・栽培活動)(環境構成)(ことばの教室・特別支援)を落とし込んでいったらどうか…

軌道修正を繰り返しながら、11月に今の形のグランドデザイン(巻末)になり、研修の方向性があきらかになった。また、グランドデザインの内容精選と並行して、園内の環境構成を見直し、園庭にある植え込み「せせらぎ」に着目し、遊びたくなる環境構成の工夫に取り組んだ。また、SDGsの推進の一環として、ミミズコンポストでミミズを飼育し、保育の栽培活動に生かす実践を始めた。

② 園庭の植え込み「せせらぎ」の活用方法検討

本園のある原田地区は、富士山の雪解け水である地下水が豊富で、昔から湧き水が至る所から出ていた。園の傍にも小さな沢が流れていて、時々、沢蟹が園庭に紛れてやってくる。昔は園庭にも池が作られていた。

現在は危機管理のためか、埋め立てられているが、木々はそのままに残っていて、その場所を「せせらぎ」として子どもたちの好きな遊び場になっている。子どもの好きな場所をどのようにもっと保育に生かしていくかを考えることとした。

職員の他に、環境アドバイザーや評議員にも実際に見ていただきながら、一緒に遊びの内容を考える機会をもった。また、せせらぎでの遊びの様子を家庭に知らせ、家庭の不用品で遊びに使用できそうな物を集めるなど、地域や保護者を巻き込んで環境作りを行った。子どもの発想や反応に合わせて用具や材料を出すタイミングを見計らったり、1人1人の気づきに丁寧に関わったりしてきたことで、「やってみたい」「おもしろそう」と夢中になって遊ぶ子どもの姿が見られた。

③ ミミズコンポストプロジェクト

生態系を考えるきっかけとしてミミズの飼育を始めたが、野菜くずや水の量、どのような場所で飼育するのがよいか、職員たちも初めての取り組みで、まず職員がミミズの特性を知ることが第一の課題であった。ミミズが弱ってしまったこともあり、専門家に聞いたり、調べたりしながら手探りで飼育を始めた。飼育しているとミミズが好んでよく食べるものがわかってきて、愛着が湧き、職員も夢中になって育てるようになった。取り組みを家庭にも知らせて、家庭から野菜くずを持ってくるもらったりしながら、子ども、保護者に興味・関心が広がるきっかけになった。

(2) 1年目の成果と課題

自分たちがやりたいことは何か、目指すべきところはどこか。グランドデザインを深く見直すことで、職員全員が同じ方向を向いて、研修を進める土台ができていった。やるべき方向性が見えたことで、取り組むこともより具体的になったので迷いがなくなった。何よりも、「せせらぎ」の活用を話し合う中で、どうやったら遊びが面白くなるか考えることが、職員自身にとっても楽しみになり、子どもも自由な発想が増え、その思いに応える形から、相乗効果で、主体的な子どもの姿が見えてきた。



(2022年11月8日撮影)

＜具体策＞ 遊び出したくなる環境の工夫 事例1 『せせらぎを中心とした遊びの環境作り』

子どもたちはせせらぎの生け垣の中に座ってほっと一息ついたり、落ち葉や木の実を拾ってお土産にしたりするなど、自然とせせらぎに集まる姿がよく見られた。そこで原田幼稚園の特色として、魅力ある環境であるせせらぎを活用しようと考えた。

・子どもの姿 (5歳児、4歳児) ○環境構成 ☆教師の援助 教師の思い

2021年10月

どんな風に遊び出すかな？

○せせらぎでごっこ遊びが始まったので、入り口に柵、コロ、バーベキューセット（網、トング、皿、鍋など）を出した。

- ・M子「これ運んでいいの？」と好きな場所に柵を移動し、遊び始めた。A男、R男、R子、K子は、柵に網をのせてバーベキュー台を作り、葉っぱを肉に見立てて焼いていた。「まだ焼けないかな？」「ちょっと見てみよう。」「お皿持ってきたよ。」と、それぞれが思ったことを声に出しながら遊んでいた。



楽しい遊びが始まったな。子どもの声を生かして環境を充実させていこう。

○水道で水を汲んで使う様子があったので、道具入れの近くにも水を入れたたらいを用意した。

- ・コップに水と葉っぱを入れてジュースにしたり、鍋に砂やどんぐり、水を入れて味噌汁を作ったりして遊び始めた。
- ・I男「こっちはお肉を焼いてるよ。」A男「お肉入れるお皿持ってきた。」T「どんな味かな？」I男「待ってて。今お塩かけるからね。」と指先で砂を摘まむとパラパラと肉にかけていた。

調味料入れがあったら、もっとイメージが広がるかもしれないな。

○新たにフライパンやヤカン、調味料入れを用意し、お皿や鍋の数も増やした。

- ・コロをテーブルにしてご飯作りが始まると「コショウにしよう。」と調味料入れに砂を入れ、網の上に並べた葉っぱのお肉に振りかけていた。他にもフライパンで炒め物をしたり、焼き鳥や味噌汁を作るなど、料理の種類が増えた。

園で味噌作りを体験し、味噌汁を作って味わったことも遊びにつながっているな。

2021年11月

○お家ごっこが始まったので、小さい柵やランタン、布製の大きめのレジャーシートを用意置き場に置いた。

- ・年中児がシートの上に囲むように柵を置いて、「ここお家。ここは冷蔵庫！今冷やしてるんだ。」と、お家での料理作りを楽しんでいた。

○せせらぎで使えそうなものを保護者に投げ掛けると、大きな黒いシートをいただいたので、発色の良いアクリルガッシュで伸び伸びと絵を描く機会を設けた。

- ・T「この黒いシートどうする？」S男「バーベキューごっこの屋根にしたい。」とせせらぎにシートを運ぶと、木に張ってあったロープに気付いたことでシートの屋根が出来上がった。屋根が出来上がると、屋根の下に家を作り始め「ここには冷蔵庫が欲しい。」「これはテーブルね。」と見立てた柵を運んで家作りをしていた。



<具体策> 遊び出したくなる環境の工夫 事例2 『子ども主体の遊びの広がり』

進級当初から互いのクラスを自由に行き来できるようにしたが、年中児にとっては新しい環境に慣れることで精一杯であり、行き来する子は毎回同じだった。また、部屋が区切られていることで互いの遊びも見えにくかったため、空き保育室を活用して2学年が共通で遊べる場「あそびば」を作ることにした。

・子どもの姿 (5歳児、4歳児) ○環境構成 ☆教師の援助 教師の思い

2022年5月6日

○自分たちが遊ぶ場所への期待が膨らむように、年中と年長組で使用していた棚や用具を子どもと一緒に運んで「あそびば」へ移動する時間を作った。

☆「使いたい物は全部持って行こう!」と、子どもたちが必要な物を選んで運べるように促した。

・自分の好きな遊びの道具を手に取り、教師や友達に声を掛けながら張り切って運んでいた。「いいね!」「もも組と緑組の遊びが合体した。」「遊ぶ所が広がったね。」と嬉しそうだった。

明日からの遊びを想像してワクワクしているな。遊びやすいようなコーナーにしよう。

○子どもたちが運んだ用具を整理し、製作、積み木、ままごと、ブロック、お店屋さんごっこのコーナーを設定した。

2022年5月中旬

・好きな遊びを見つけて進んで遊び出す中、特にブロックで遊ぶ子が多かった。乗り物を作ると「走らせたい」の気持ちから積み木を並べて道路作りが始まり、積み木が足りなくなると「もっとほしい。」の声も出ていた。

☆すぐに子どもと一緒に教材室に積み木を取りに行った。

・コルク製の積み木やニューブロックがあることに気付いたM男、R男が、「これも使いたい!」と運んでいた。

素材の異なる教材を組み合わせても面白いかもしれないな。どのように使うか見守っていこう。

・積み木で作った道路が広がると街をイメージして、道路の横に家や動物園も作るようになった。

○友達と一緒に作り上げていく楽しさを感じられるように作った道は広げて残しておき、ブロックを飾る棚やネームプレートを準備して続きができるようにした。



作った物を大切にしようになってきたな。



・毎日少しずつ付け足したり変えたりしながら一つの物をじっくり作る姿が出てきた。M男「ここは橋だよ」N男「こっちに家を作るね」などと会話しながら作り進めるうちに、段々場所も広がっていった。

・折り紙で花を折って空き箱に貼り、花畑を作るY男、R子、Y子。小学校への園外保育後には、散歩で見た睡蓮の池を折り紙で作って再現する姿もあった。完成後は道路の横に置き、作った車でドライブをしていたK子、K男の目的地にもなっていた。

<具体策> 体験活動の充実 事例3 『ミミズコンポストの取り組み』

SDGsへの取り組みを意識しようとミミズコンポストを新たにはじめ、今まで行ってきた飼育・栽培・食育活動とつなぎ合わせながら、食の循環に触れられるようにした。

・子どもの姿 (5歳児、4歳児) ○環境構成 ☆教師の援助 教師の思い

2021年

まずは、自分たちがミミズのことを知らなくては！

○子どもと一緒に絵本を見て学んだり、インターネットや実際にコンポストを行っている方たちから情報を得たり、自宅でミミズを飼育したりした。



- ・大量のミミズと対面し、中にはびっくりした子もいたが、「かわいい！」と言って触れる姿が多かった。
- ・年少・年中組の玄関にコンポストを設置したことで、外に遊びに行く際に「ミミズちゃん行ってくるね。」と声をかけ親しみを感じていた。



○年長組からは目に入りにくかったので、飼育ケースでミミズを飼い、親しめるようにした。

- ・家庭から持ってきたバナナの皮や園で出た大根の皮を入れ、ミミズが食べて分解されていく様子を観察したり、ミミズのおしっこを混ぜて野菜の水やりをしたりし、ミミズが野菜くずを食べ、その尿が栄養になることを何となく感じ取っていた。



ミミズが弱ってしまったり数が減ったりしたので、飼うのに精一杯だったな。来年度はもっと子どもが関わる場を増やしていきたいな。

2022年4月～5月

- ・幼稚園でも野菜を育てよう！とみんなで話をし、T「古い土だから栄養がないんだよね。どうしたらいいかな？」と投げ掛けると、S男「栄養を足してあげればいい。」Y男「ミミズのうんちを入れればいい。」と声が上がった。

ミミズの糞が栄養になる事を覚えていた！うれしい！

- ・コンポストにできていた堆肥を持ってくると、T男「さらさらしてる！」K子「何にも臭いしないよ。」と、実際に触れたり臭いをかいだりして感じたことを伝え合っていた。

○ミミズの堆肥と土・苦土石灰・牛ふんを用意した。



- ・みんなで混ぜ栄養満点の夏野菜用の土を作り、ナス、キュウリ、ミニトマト、枝豆などを植え、水やりをしながら変化や生長を楽しみにしていた。

☆栄養が足りないことに気付けるよう、葉の色の違いを投げ掛けた。

キュウリの葉の色が悪いな…。

- ・昨年度ミミズのおしっこを薄めて水やりしたことを覚えていたR子、S男、Y子から、「大きくなってほしいからミミズのおしっこを入れて水やりをしよう。」「もっと栄養をあげよう。」という声が上がった。

○子どもが水やりをする際、水道の近くにミミズのおしっこを用意しておいた。

- ・ミミズのおしっこを入れて水やりすることで、キュウリの葉が段々と濃い緑になり野菜が元気になってきたことを感じるS男や、「ナスが好きだからたくさんなってほしいな。」とナスにたくさん水やりをし、実を付けることに期待を膨らめるY男の姿もあった。



玄関に置いたままだと、なかなか子どもの目に入らないな。もっとミミズを身近に感じてミミズと触れ合ってほしいな。

＜具体策＞ ことばの教室との連携 事例4 『通級児の情報交換、指導の共有』

年長児K子は、発音が全体的に不明瞭なため2021年10月末よりことばの教室に通級している。語いの少なさや聞く力、記憶力、粗大運動での体の動きなどいろいろな部分に未熟さがあり、4歳児の間は発音の土台である口腔機能面を育てながら、語いを増やすために、担当と1対1でのごっこあそびを主に行ってきた。K子は理解するまでに時間はかかるがやる気があり、あきらめずに取り組む力もあるため、視覚的な援助を手がかりに指導を行っている。5歳児では発音指導を主に行うと同時に友達との関りの中での語いを増やすことを目的とし、クラスとの連携をより意識して関わっている。

・子どもの姿 (5歳児、4歳児) ○環境構成 ☆教師の援助 教師の思い

2021年11月

○ことばの教室での買い物ごっこで、店に行く道中にK子の得意な1本橋を取り入れ、楽しみながら行えるように設定した。

担任から聞いた得意なことをことばの教室でも取り入れたらやってみようと思えるかな？

・「りんご3つ買ってきて」と担当の声掛けの後、橋を渡り約1m先のお店屋さんに行く途中でK子は「いちご？」「2個？3個？」と忘れることがあった。

○覚えていられるように、伝える時は写真や絵等を見せながら話をした。

・忘れた時は買い物メモを確認に使うなど視覚を手がかりに遊ぶと、少しずつ覚えていられることが増えた。

☆担任にもその様子を伝え、指導終了後にK子が担任に楽しかったことを1つ伝える場を持った。また、話の手がかりになるように写真を見ながら振り返ることができるようにした。



担任に伝えることで記憶力が高まるかな？

・最初は担任へ「忘れた。」「買ったよ。」など単語での返しだったが、3月末には「りんご買ったよ。」など遊んだ内容を思い出し自分なりの言葉で伝えられることも徐々に増えてきた。

2021年12月

・ことばの教室での担当との会話で「これとそれとあれ（で遊んだ。）」と知っている言葉も指示語で話すことが多かった。

○遊びの中でいろいろな言葉でやりとりができるようにままごとを設定した。

知っている言葉は使ってほしいな。遊びの中で引き出したいな。

☆担当も意図的に動きと言葉がつながるように「フライパンで炒めるとおいしくなるね。」と会話の中でK子の行動を言葉にしたり、いろいろな言葉を知らせたりした。

・ままごとで「先生！みかんを一緒に食べよう。」など知っている言葉で話し、指示語での会話が減ってきた。

・料理作りに熱中し始めると会話が少なくなっていた。

もっと話すことを楽しめるように大好きなドキンちゃんの人形も出してみよう。

・人形が側にあるとドキンちゃんになりきって遊び、「ドキンちゃんが（料理を）運んであげるわ。」など会話が増えた。担当との会話を通し知らない言葉も少しずつ覚えてきた。

☆担任に指導の様子を参観してもらい、クラスでも会話の中で意図的に物の名前や動詞、形容詞等を知らせるようにし、ことばの教室とクラスでの対応を共通にした。

<具体策> ことばの教室との連携 事例5 『口腔機能を育てる体操や遊び』

ことばの教室が併設されており、通級児だけでなく在園児や担任にも囁むことの大切さを知らせたい思いから、食事の時間にはランチルームへ出向き、口の体操や食事の姿勢など助言する時間を設けた。また、食に関心がもてるようなランチルームの活用を担当と一緒に考え、子ども達と一緒に作っている。

・子どもの姿 (5歳児、4歳児) ○環境構成 ☆教師の援助 教師の思い

2022年4月下旬

○コロナ感染対策として黙食をしているため、栄養表を個人持ちにしたり、食事の終わった子が絵を描いたり折り紙を折ったりして自分の席で待てるようにした。

・好きな食べ物を描いたり栄養表と見比べたりするY子の姿があった。

目で楽しめるような温かい雰囲気が作れると良いな。



○食育の絵本をクラスで読んだり、栄養素の仲間分けができるようなボードや作成したげんきずを提示したりした。



・食べ終わってからごちそうさまの挨拶までの時間、食べ物の絵を描きながら楽しんでいた。S男は、栄養表と自分達の作ったボードを見比べながら「白の仲間がないから、後で作るよ。」と楽しんで食事をしていた。

2022年5月

・食事の前にあめ玉体操を行うことが定着してきているが、慣れてきて雑に速く行う姿が見られた。

○あめ玉体操のやり方をことばの教室担当がもう一度教える機会を作った。



しっかりやると舌の動きが良くなり、より正しい発音につながるのにもったいないな。

☆コロナ禍で担当がマスクを外して行うことができないので、図示した物を見せたり、舌で頬を押しているか一人ひとり確認したりして丁寧に知らせた。

2022年6月上旬

・舌で頬を押しているか分かるように、自分で頬を指で確認しながら行う子が増えてきた。

○子どもたちに馴染みのある『ひげじいさん』に合わせて行うことを提案した。

・ことばの教室でも行っているR子は、得意に鼻歌を歌いながら行っていた。

☆R子をはじめ、ことばの教室に通っている子にリーダーになってもらい、手本となるようにした。

・舌ではなく空気で頬を膨らめていたT男や舌を一周回す時にどうしても口が開いてしまうR男や疲れて途中でやめてしまうK男も、友達がやっているのを見ることで真似してできるようになり、担任や担当に褒められたことを喜んでいました。

担任や担当が同じ場面で認められるっていいな。

3 研究の成果と課題

園内研修での対話を通して得た研究の成果と課題、省察を以下に示す。

(1) 教師の気付きと子どもの変容

①2年間の研究の中で、子どもたちの実体験が遊びに深く結びついていくことを目の当たりにし、教師自身も体験や遊びの「つながり」を常に意識して考え、環境構成や援助をするようになった。その結果、子どもたちが、実際に経験したことからの気付きや、意見、もっとこうしてみようという思いを伝える場、自分から発信できる場が増えた。

②子どもたちが考えながら、じっくり遊びに取り組むには、長いスパンの見取りが必要であり、続きの遊びを積み重ねていけるように、場を残す保証をしたり、自由に使える道具や材料が身近にあったりすることが大事であることが分かり、職員間で意識してきた。その結果、子どもからの自発的な思いがより出てくるようになった。

③子どもからの「こうしたい」という思いに応える形で保育の展開を考えるために、教師がしっかりと子どもの思いを受け止めようと心がけ接してきた。その結果、自分たちの思いが教師に受け止められているという実感につながり、より安心して自分の気持ちを出したり、力を発揮したりするようになった。

④やりたいことを実現するために、自分のことを話すだけでなく、相手の思いを聞いたり、相手に分かってもらうように伝えようと言葉を考えたりする力につながった。

⑤体験活動を意識して取り入れたことで、飼育栽培の興味関心が高まり、自分から関わる子が増えた。自分が大切に育ててきた思いがあるからこそ、見に行ったり、気にしたりする姿が自然と見られるようになった。

⑥異年齢の交流を意図的に考えなくても、同じ場にいることで一緒に生活する仲間になり、互いに教え合う姿が見られた。

(2) 課題

①教師自身が実体験を遊びにつなげていくイメージを持ちながら保育にあたることが大事であるが、教師の押し付けであってもならないので、その塩梅の難しさを感じた。

②2年間を通して行ってきたことが、そのまま、次の年にもつながっていくこと、延々と遊びはつながりがあることを感じた研究だった。園の特徴を生かした保育が受け継がれていく中での子どもの学びはとても大きい。本年度で閉園することになってとても残念である。

(3) 研究を振り返って

①テーマを絞って、「環境」から皆で考えたことで、意見を出しやすくなり、職員間での対話が増えた。話し合いを重ねたことで、共通理解が深まり、個々の内面理解や、教師間での連携にもつながった。

②職員には、それぞれの得意不得意の分野があるが、それを踏まえてチームとして皆で園全体の子どもたちを育てるという意識が、皆が同じ方向を向いて取り組むことにつながった。

③子どもの様子を発信し伝えながら、地域の人材や保護者の協力を得たことによって、教師にも気付きがたくさんあり、より面白いアイデアや、遊びの発想につながることを感じた。

可能性がたくさんあり「楽しい」と感じる毎日を、子どもも教師も同じように感じあえる保育環境でありたい。

おわりに

第一筆者は「何が正しいのか、もっとよりよい方法があるかもしれませんが、私たち原田幼稚園に関わる職員の悲喜こもごもを交えたありのままの研究の過程を皆様にお伝えすることで、それぞれの園の今後の研修や保育に役立てていただけたら幸いです」とと研究発表要項にて述べている。

幼児教育は、環境を通して行う教育を基本としている。環境とは一般的に、生物の生活について考えられている概念であり、生きている生物の周囲にあって、相互作用を持つすべてのものを指す。幼児教育では、主体となる子ども一人ひとりが、人的環境、物的環境、自然事象、社会事象、時間、空間、人や物が醸し出す雰囲気などとの相互作用の中で、発達に必要なことを獲得していく。主体を取り巻く環境は、複雑で同じ状況は起こりえない。

言い換えると、教育実践では、似ている状況は生じするかもしれないが、同じ状況は2度と起こらない。ゆえに、保育者は絶えず子どもから学び、場を共にする仲間と学び続ける姿勢が必要であり、そのプロセスを明らかにしていくことで、保育の質は向上していく。そこに、第一筆者の述べた言葉の重さを再確認せざるをえない。

参考文献

- 田宮縁 (2018) 体験する・調べる・考える 領域「環境」第2版. 萌文書林
- 田宮縁 (2022) 保育プロセスの質リフレクシオンシート第2版
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館
- 文部科学省 (2021) 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開. チャイルド社

園 教 育 目 標

いきいき元気な子

重点目標 夢中になって遊ぶ子

本園の実態

(園児)

- ・素直で明るく、思いやりがある。
- ・意欲はあるが、慎重で遊び出すまでに時間がかかる。
- ・人や物への関わり方に個人差がある。

(保護者の願い)

- ・人との関わりがもたらす楽しさ
- ・自分のことは自分でやる子
- ・思いを言葉で伝える子

(地域)

- ・保・小・中・高校が近くにあり交流がもちやすい。
- ・大切に守り伝えられている名所、旧跡が多くある。

幼稚園教育指導方針

(県)静岡県教育振興

基本計画

『有徳の人』の育成

(市)富士市教育振興

基本計画

明日を拓く 輝く

「ふじの人」づくり

学年目標

(3 歳児 先生や友達と一緒に好きな遊びを十分楽しむ。)

4 歳児 友達と思いを伝え合いながら、一緒に楽しく遊ぶ。

5 歳児 友達と共通の目的に向かって、考えを出し合った

り力を合わせたりして遊びを進めていく。

研修テーマ 主体的な子どもを育む環境構成

～少人数の良さを生かした保育～

具 体 策

遊び出したくなる環境の工夫	体験活動の充実	ことばの教室との連携
・せせらぎを中心とした遊びの環境作り ・子ども主体の遊びの広がり ・子どもの発想を引き出すための教材研究や素材選び	・ミミズコンポストの取り組み ・味噌作り、クッキング ・花、野菜の栽培 ・生き物の世話 ・収穫を喜び、野菜を味わう	・通級児の情報交換、指導の共有 ・口腔機能を育てる体操や遊び ・指導の専門性の向上 ・言葉の発達を促すことで主体的な子どもを育てる実践的研究

- ・保、幼、小、中との連携
- ・家庭地域との連携

研修の充実

- ・つぶやきの記録
- ・リフレクシオンシート 研修
- ・特別支援教育の充実
- ・SDGs への取り組み